

「明智軍記」と明智光秀

鈴木 穂奈美

はじめに

私は大学の卒業論文において明智光秀を題材として扱いました。元来光秀に興味があったこと並びに大河ドラマ誘致事業に共鳴し、今回駄作ながら応募させていただきました。私は今回、江戸時代に成立した「明智軍記」という史料を使用しました。光秀に関する文書など一次史料で話を創作しようとも考えたのですが、光秀の新たな人物像を描くことが困難であったために「明智軍記」を使用しました。その理由は光秀を主人公として活躍を中心に描き、また未だ不明な点が多い光秀前半期を創作を交えながら詳細に描いていること、全体的に小説的な要素が盛り込まれていて、大河ドラマの題材として非常に興味深かったと感じたからです。また、光秀が山崎合戦後も生き続けたという俗書ではありますが史料も挙げました。自分の意見としては、これらの後世に創作された史料や一般的に用いられる「信長公記」で描かれる光秀の活躍を描いて素敵なストーリーが完成するよう祈念しています。

1、「明智軍記」の特色（二木謙一『明智軍記』新人物往来社 1995年を参照。）

- ・ 作者は不明であるが、江戸時代元禄期（1688～1704）に成立したものと考えられている。
 - ・ 光秀が主人公の唯一の軍記物。
 - ・ 謎に包まれた光秀前半期の行動を詳細に描いている。
 - ・ 全体として参照している史料として「信長公記」を使用しているものと思われる。
 - ・ 筆者の概念として「天道」思想すなわち因果応報の概念を重視。
「信長父子ハ信長殺セリ、更ニ明智ニ非サル事ヲ」→ 本能寺の変は信長自身で招いた結果。光秀汚名の脱色。
 - ・ 全体的にいえることであるが、史実とは大きく乖離している点が散見。誤謬充満。
- ⇒ しかし、明智光秀に関して類書が少ない中便宜使用が現状。

2、「明智軍記」の中の初期の光秀

- ・ 弘治二年、美濃・斎藤義竜家臣、明智光安入道宗宿は斎藤竜興に攻め入られる。その甥・十兵衛光秀は光安から、「命ヲ全シテ、名字ヲ起シ給へ。」という命を受けて、某息男・弥平次光春、甥・次郎光忠と一緒に明智城から脱出し、越前・朝倉義景のもとに向かい仕官して、五百貫の地を拝領した。
 - ・ その後朝倉家臣として、永禄五年（1562）加州一揆攻めに従軍した。その時の光秀の活躍を、
「櫓井楼ニ上リ鉄砲ヲ列放シ懸タリケレバ、一揆ノ輩鉄砲ト云名ノミ計ハ関ケレ共、始テ斯ル物ニハ逢ツ。
（中略）宗徒ノ郷民三百人余人、将棋倒ノ如クニ轟轟と打倒サレ（中略）明智十兵衛ニハ、敵可寄来気ヲ察シ、殊ニ鉄砲ヲ以テ数多ノ一揆ヲ打亡シ、其上軍配ノ諫言ヲ申条、何レモ神妙ノ至リニ思召由ニテ、義景ヨリ賜御感状（中略）」と記している。
- ⇒ 光秀は鉄砲を駆使した活躍のみならず、義景の軍師的役割としても存在。

- ・ 光秀の鉄砲の才能に感歎した義景は腕前を更に見たいとして披露するよう光秀に命じる。
「近日汝ガ鉄砲ノ様子見物スベシトソ宜クケル。光秀畏承、安養寺下ナル西ノ馬場辺ニ射塚ヲ築キ、北ニ向テ二十五間ニゾ構ケル。ステ、義景出サセ給へハ、御内ノ侍数ヲ尽シテ扈從シ、見物ノ貴賤群集セリ。則、一尺四方ノ的立テ、四月十九日巳ノ中剋ニ放シ始テ、午ノ貝吹黎ヒニ一百ノ鉛玉を打納タリ。黒星ニ中ル数六十八、残ル

三十二モ的角ニソ当リケル。諸人は是ヲ感歎シテケリ。其後義景、明智ガ才芸ノ程ヲ感シ給ヘルニヤ。」

・光秀は弘治二年（1556）の秋から美濃国ヨリ当国へ罷越シ、長崎称念寺ハ所縁ノ僧ニテ御座候故、彼ノ領内ニ妻子ヲ預置、同三年ノ春ノ比、廻国修行の旅へ赴く。

⇒ 旅では全国の大名のもとを訪ね、「敵国ヲ討随シ武勇智謀ノ兵術ノ次第」を学んだとする。

※長崎称念寺…福井県坂井市丸岡町長崎。時宗寺院。

・しかし、義景は家臣から「普代ノ長臣ヲ慢リ、後々ハ主君ヲ褊シ、必ス恨ヲ含、野心有者ニテ候由」という讒言を聞き、光秀は「近習ヲ除カレ」、信長のもとへ向かい家臣となる。（「山城守ノ好ナレバ、光秀旧里ニ帰り、家ヲ起シ、世上ニ名ヲモ知ヨシカト」）

3、光秀の活躍

・信長家臣としての光秀は、信長から才能を認められ様々に活躍する。その光秀の印象として、**鉄砲使い・城づくり・軍師・物知り**といった印象である。以下はその活躍の中から三つの光秀の事績を取り上げた。

①三好一族將軍御館攻事付被築二条城事（永禄十二年、1569年）

「丹羽五郎左衛門・明智十兵衛・木下藤吉郎三人ニ被仰付、二条通大宮ノ境地ヲゾ見立ケル。因茲、繩張モ、則三士ノ被任相談。中ニモ明智十兵衛ハ、先年武者修行ノ時分、豊後国ノ住士・角隅越前入道右宗ト云士、鎮西無双ノ軍法、城取ノ名人ナリ。彼ガ秘書無残所相伝セシ故ニ、**光秀繩張ノ棟梁タリ。**」

→ 足利義昭の二条御所を建築する際に丹羽長秀と木下秀吉と共に携わったとし、光秀は修行中に得た知識を活かして、棟梁として建築の指揮をしたとしている。

②信長御居城被定シ江州安土事付天守事（天正四年、1576年）

・信長が「此上何ニテモ汝存寄有之バ、可申宣ケリ」と光秀にいったのに対し、光秀は廻国修行中に安房国館山の里見義弘の三重天守、周防国山口の大内義興の三重天守を見物したことを話し、

「五常五行ヲ表シ、五重ノ天守ニ被仰付、尤ニ候」と信長に進言したところ、「**信長公御感悦不斜**」と喜んだとしている。

→ 安土城の天主の建築に関して信長から光秀に意見を求めたところ、光秀の造詣の深さに信長が感歎したとしている。

③於京都馬揃事付国々退治事（天正九年、1581年）

・「南北八町、東西二町ニシテ、四方ニ五尺ノ土居ヲ築、其上ニ竹木ヲ以テ、高サ六尺ノ矢備ヲ結ビ、偕、中ノ左右、仮屋ノ棧敷ヲ数百軒作並べ、下ニハ毛氈ヲ展布、高欄ハ縮羅・金繡ヲ以テ裏ミ、幔幕風ニ飛揚セリ。」

→ 信長から内裏で馬揃えの奉行を命じられた光秀は各地の大名の招集命令から、当日の運営まですべてを統括した。

⇒ しかしながら、①と②に関して光秀が実際に携わった証拠（史料）は無く、あくまで「明智軍記」の創作である。

4、光秀の謀反

「惟任日向守企謀叛事」（天正十年、1582年）

・五月十七日までの家康の安土饗応の後、信長からの使者・青山与三に「惟任日向守ニ出雲・石見ヲ賜フトノ儀也」との伝達を受け光秀は了承したがその後、「(中略) 去ナガラ、丹波・近江ハ召上ラルハノ由」という事を聞かされた光秀は「闇夜ニ迷心地」と自分の将来に不安を抱き、落胆した。そして光秀は家臣たちからの信長討伐

の進言も受け、「殊ニ今係ル難題ヲ仰懸ラルハニ付テハ、当家ノ滅亡ノ時節到来不及是非次第。当月下旬ニハ、信長・信忠者共ニ上洛有ベキト聞ケレバ、思知セ可申也」と謀反の表明をする。

→ 謀叛に至るまでの理由は「明智軍記」創作の説である。

⇒ まとめとして光秀は美濃を追われた後、全国各地に「廻国修行」して軍学を学び続たことが朝倉義景家臣として仕えた際に鉄砲の腕前を合戦で披露したり、義景の軍師としても活躍した。また、信長の家臣となったあとも台頭し鉄砲名人・信長の軍師・城作りの棟梁として活躍したが、信長に叱責されたり冷遇されたことによって、自分の将来に不安を覚え謀反の決意に至った。

5、光秀の死後

・「明智軍記」(明智日向守最後事付光慶病死事)では山崎合戦に敗れ、深手を負った光秀は辞世の句を「逆順無二門、大道徹心源、五十五年夢、覚来帰一元」としたためた後、側近の溝尾庄兵衛に介錯されたとしている。

・また、俗書の類ではあるが光秀が山崎合戦の後も生き延びたという話も見受けられる。

「明智日向守光秀、山崎没落ノ時、ヒソカニ遁レテ、濃州武藝郡洞戸村佛光山西洞寺ニ隠レ居テ、姓名ヲ替テ、荒澤又五郎ト称ス、関ケ原役ニ神君ニ属シ奉ルヘシトテ、親類ヲ率ヒテ出陣セシカ、路次ニテ、川水ニオホレ死セルト云々、(中略)」(「兵家茶話」巻四)

→ 光秀は山崎合戦後美濃で「荒澤又五郎」と名前を変え、隠遁していたが東軍に与し関ヶ原合戦に出陣しようとしたが川に溺れ死んでしまったという。これは「盈筐録」(巻三九三 明智光秀の条)にも上記と似たような話が掲載されている。また、江戸時代の庶民の光秀に対するささやかな思いや期待の意味合いが感じられる。

参考文献

- ・二木謙一『明智軍記』新人物往来社 1995年
- ・東京帝国大学文学部史料編纂掛編『大日本史料 第十一編之一』東京帝国大学 1927年
- ・奥野高広、岩沢熹彦校注『信長公記』角川文庫 1969年